

# わが国の無貨幣時代とその解体

三 上 隆 三  
Mikami, Ryuzou

## ABSTRACT

In Japan, the non-monetary economy changed himself into the monetary economy from fin-de-siècle of 11 and to 12 c.

This change was chiefly brought by two factors. First of them is the widely and deeply expansion of productivity in the agriculture. Another factor is import of very large quantity of the copper coin from China. This is proved by the action and the works of two persons —— Aoto Fuzitsuna and Yoshida Kenkoh (Kaneyoshi).

## 一 律令政府と明治新政府

江戸幕府を倒して政権をわがものとした明治新政府は、世界の潮流に乗るべく、それを推進・指導している西欧諸国とアメリカ合衆国のもつ西欧文明・文化の導入を強力につとめた。それはいわば国是として政府＝官が率先して導入したのである。

明治2＝1869年、東京・横浜間に電線が架設されて電信業務が始められた。

明治三年、官営の前橋製糸所が創設

明治四年、郵便事業が始められた、等々。

一群のこれらの西欧文明・文化の導入のなかにあっても、文字通り政府・官の率先垂範といえるものは、明治五年の新橋＝東京・横浜間で営業を開始した、  
オカジョウキ  
陸蒸気こと鉄道の開通であろう。これはまさしく壮挙といえるものだった。

政府＝官が率先して国勢を推進するということは、上述の明治新政権だけの独壇場ではなさそうである。話は明治新政権の西欧文明・文化の導入に大童<sup>オオワラフ</sup>だった時より、凡そ1150年さかのぼった、奈良は藤原京で和銅元（708）年に、日本第一号銭である和同開珎銅銭を鑄出したいわゆる律令国家政権も同じである。

いわゆる皇朝十二銭については、既に拙稿『貨幣の誕生——皇朝銭の博物誌』（朝日新聞社刊・平成10（1998）年）によって論究していることでもあり、その一切を割愛することとする。ところでこの律令政権は、中国での貨幣流通の情報を得て、中国をとりかこむ競争相手の諸蕃＝諸国——新羅・安南・大食（サラセン）<sup>トバン</sup>・吐蕃（チベット）等々よりも、日本は文化的に中国により近い水準にあると誇示するために、わざわざ和同開珎銅銭を鑄造したというのがその大きな理由の一角をなしている。

明治新政権の西欧文明・文化の導入は、その後の根付きも順調に進行し、現在日本につづいている。しかし律令政権のそれは国力を無視しての独走のきらいがあった。ために奈良の都を中心にする周辺地域には、一応の貨幣流通圏は成立した。しかし遺憾せん、物々交換世界の大海にかこまれた一小孤島の位置にあるのが皇朝銭の流通圏だったのである。地方から徴用されて奈良の都の建設に従事した人々が、銅銭流通圏をはずれた故郷への路上で、懐には和同銭をもちながらも餓死した死体となってゴロゴロと多く転っていたと『続日本紀』<sup>シヨクニホンギ</sup>は語っている。

## 二 無貨幣時代

和同開珎（和銅元＝708年）の出現から貞元大宝（天徳二＝958年）——<sup>シヨウカイ</sup>『拾芥略要抄』によると応和三＝963年7月5日条に貞元大宝鑄造了とある——までの二五〇年間は、いわば上からの強制貨幣化時代だったといえる。その反動としてその後の日本は無貨幣時代に突入することになる。いいかえると、日本の圧倒的大部分を占めていた物々交換＝自然経済の波が、絶海の一孤島たる貨幣流通圏をスッポリと呑みこんでしまったのである。

皇朝錢鑄造停止後、約 200 年は無貨幣時代だった。とはいえ、人間社会の営みにともなう当然の物流はあるわけで、米や布帛<sup>フハク</sup>、つまり綿・絹の織物を用いて取引する自然経済がつづく。いわば米・布帛が交換手段となり、これを准米・准布・准帛とよんだ。それはどれも准＝ヒトシイ・同じという意味である。

東寺の創設以来の文書<sup>モンジョ</sup>は、東大寺のその 15,000 点をぬき、二万数千点もあった。これを収納・保管するため、時（江戸時代）の加賀藩主・前田綱紀が桐箱百個＝百合<sup>ゴウ</sup>を寄贈したところから、一般的に東寺文書は東寺百合文書<sup>ヒャクゴウ</sup>とよばれている。

この東寺百合文書の中にある左京一坊在の同じ地所について、延喜 2 = 902 年と正暦 4 = 993 年の二時点における、売買をふくむ 993 年までの卷文<sup>ケンモン</sup>とよばれる権利書類がある。それには天元 2 = 979 年までは錢によって価値が表示されているが、以降は米 12 斛<sup>コク</sup>＝石と表示されている。これによって貨幣流通の実情は察知できるであろう。

永観（983-985年）のころに銅錢は忌避され、「銅錢原直（＝値）也」（『日本紀略』永観 2 年 11 月 6 日条）という。つまり銅地金としてのみ受取られるということである。もとより政府は永観 2 = 984 年には銅錢流通のための破錢法を出している。寛和 2 = 986 年には庶民が銅錢を使用しないので、政府は銅錢流通のために神社・山陵へ祈願することが議された。

女流歌人・伊勢の短歌が『古今和歌集』にある。「家を売ってよめる」と題するもので

あすか川 ふちにもあらぬ わが宿も

せ（＝瀬）にかはりゆく ものにぞありける

この和歌は、有名な古歌

世の中に 何かつわなる 飛鳥川

きのふの渚ぞ 今日瀬になる

をふまえるものであることはいうまでもない。わが宿は飛鳥川の渚でもないのに「瀬に」＝「錢」に変わってしまったのね、というわけである。実際は落ちぶ

れて家を買ったというよりは、言葉遊びよろしく、面白く歌にしたまでのことにすぎない。実際に家を買ったのなら米で売ったかもしれない。但し時期的にはまだ貨幣がとにかく流通してはいた。

寛和2 = 986年「是則從去年九月中至干今、一切世俗錢不用」（『本朝世紀』2年6月16日条）

永延元 = 987年「上下人人不用錢貨」（『扶桑略記』元年11月2日条）

このような記録が物語っているように、このころには税の調庸・寺領からの運上・初穂料は金納から物納＝現物化していた。かくて政府は物価を准米准布准帛で示す公定物価体系としての「万物沽<sup>コカ</sup>価法」を制定し、その修正＝変動の認知を仕事とした。

沽価の沽とは売る・買うという意の文字である。沽券とは売渡しの証文→物の価値→品位と意味内容が推移し、ここから「沽券にかかわる」＝人格にかかわるという用語法が生まれることになる。

平安後期の無貨幣時代における律令体制の弛緩と、過度の労働税たる庸である徭役からのその物納への移行による解放によって生じることになる労働時間の増大——単純に考えても徭役による都への往復の日数が農耕可能日になる——や、そのころに勃興した武士集団の農業保護によって農業生産力は急上昇し物流が増大することになる。

武士といえば江戸期武士をイメージするのが常識であるが、これは武士の総仕上げの姿にすぎない。そもそも武士は農民の一種だった。農民のなかにあって無学文盲でも体力・気力・胆力にすぐれたものを中核に出現したものであって、形振<sup>ナリフリ</sup>に無関心で自分のものは自分のもの・他人のものも自分のものというヤクザ的農民が出発点だった。

農民が原野を開拓して田畠を開いても、その所有権は極めて不安定であった。律令政府＝摂関家に取上げられる可能性があるからである。この場合、一命をかけても開拓したその田地を守るものが、ヤクザ的農民として生まれてきた武士である。その場所を命をかけて死守する＝一所懸命から一生懸命という現在

用語が生まれるのである。

開墾した田＝墾田にその所有者の名をつけたものを名田<sup>ミヨウデン</sup>という。広大な名田の所有者を大名といい狭小な名田の所有者を小名と称した。中名はない。有名な熊谷ノ次郎直実<sup>クマガイ ナオザネ</sup>という呼び方のなかにある〇〇ノ〇〇の「ノ」はドイツの豪族を示す Von<sup>フォン</sup>に当るもので、名田の所有者を意味した。

### 三 中国銅銭の流入

武士の登場によって荘園の所有者＝貴族は逆に土地の所有権を脅かされることになるし、農業は武士をふくむ農民の利己心＝私益によって経営され、生産性は一段と上昇することになる。

鎌倉時代に入ると武士政権が確立し、武士支配の機関として幕府任命の地頭が全国各地に入りこみ、地主＝貴族への上納米から兵糧米を武士階級のために横取り＝割譲させることになる。

武士の利己心＝私益中心からの農業育成が一層の更なる生産性向上をもたらし、先進地帯である近畿・西日本では米と麦の二毛作が普及し、関東地方でも十年十作といわれるように豊年がつづく傾向が生まれてきた。これに伴って、物流も加速度的に増大し、その結果として、各地には定期市<sup>テイキイチ</sup>が形成されることになる。

月に三回開かれる定期市を三斎市という。例へば毎月二の日の2日・12日・22日のように。これが二日市という地名・都市名となって現在にいたる。三日市市・四日市市等がその実例である。

月に六回開催されるものを六斎市という。毎月8日・14日・15日・23日・29日・30日が開市日である。大都市には常設市が立つ。

市の設立に象徴される経済水準の上昇・動態とともに、貨幣への需要・必要性が生まれてくる。物々交換と売買取引の差、つまり当事者双方の同時満足とそうでない物流法の差が貨幣によって生み出される。貨幣は取引に当事者の同時満足を強制しない余裕をもたらすといってよい。この場合の貨幣は、奈良時

代の貨幣が政府＝官が文化水準の誇示といった上すべりの理由から強制的に流通させたものに対し、12世紀段階における貨幣は経済・経済水準自体が要求しているものであって、上すべりするどころか着実に経済の中に入りこみ、その発展を促進するものである。

日本語のウリ・カイは、神話における海幸<sup>ウミヒコ</sup>、山幸に見られる行動によるものという。山よりの瓜<sup>ウリ</sup>と海よりの貝との交換にもとづくとか?! そのウリ・カイを促進・加速・増大させるのが貨幣なのである。

各地に分散する荘園からの地主への現物を上納するかわりに貨幣で上納する代銭納（現物の輸送費・過不足・有無の問題を回避）も理由の一つとなってカワシ＝為替というより高度な知能を必要とする業務成立を刺戟する。

もう一つの貨幣の必要性を刺戟したものは、生産力水準上昇の結果としての恒常的対中国貿易である。久安6＝1150年作成の橘行長の「家地売券」は貨幣で直<sup>ヂキ</sup>＝値段を表現している。これは錢貨流通を反映するもので、12世紀ころから使用されだし、13世紀に広く流通しだした。この昂揚する貨幣欲求に対応した人物は平清盛である。昭和初期の小学校国史授業で、皇国史観による極悪人・平清盛との先入主が今も残っているが、このことを知ると彼の人物は全く別人格の印象が与えられる。既述の万物沽価法を守る四囲の人々の反対を押しきって、長寛2＝1164年に宋錢の輸入を敢行し、人々＝経済の貨幣需要に応えたのである。

中国錢の輸入はそのころに始まったのではない。鑑真和上が天平15年に第二回目の日本渡航をころみた時、船につんだものに青錢十千貫・正爐錢十千貫・紫辺錢十千貫の名がみえている（『東征伝』）

それはそれとして、中国銅錢は12世紀後半ころから輸入品目の筆頭になった。仁治3＝1242年には一回の渡航で10万貫を輸入したとの記録もある。13世紀になると、あの清盛に反対した万物沽価法側の公家でさえも輸入しているのである。広橋経光<sup>ツネミツ</sup>の『民経記』の仁治3＝1242年7月4日条に、西園寺公経<sup>キンツネ</sup>の貿易船が宋錢を中心に中国錢10万貫（一億枚）を輸入したという。

昭和末期の1970年代、韓国は新安郡智島沖で発見された韓国西海岸沖沈没船は、同船で発見の掌に乗るほどの小さな分銅に刻まれた文字から元時代の地名である明州慶元＝寧波<sup>ニンポー</sup>発日本行きの、そして同じく発見の木札・木簡から博多と東福寺あての荷物を積む船であって、それには日本への輸出陶磁器1万2500点とともに約7500貫＝28トンもの中国銅銭が積まれていたことがわかった。

因に西園寺公経による既述の銅銭輸入量は南宋の一年の総鑄造量にあたる。但し大銭の方は日本人には不向きで馴染<sup>ナジ</sup>まれず、極少量の輸入にとどまった。

逆に中国では、自国の経済のための貨幣を持ってゆかれるのだから、貨幣不足によるパニックこと銭荒<sup>センコウ</sup>が発生した。これに対処して南宋の高祖は1155年に銅銭の禁輸令を出したほどである。輸入国には地つづきの諸国や西方のイスラム諸国もあるにはあったが、日本の輸入量は圧倒的・抜群的<sup>ダントツ</sup>量であった。禁輸令が出るや価格が10倍も騰貴したといわれ、それでも輸入熱は冷えなかったようである。

因に宋銭だから宋時代に宋銭が輸入されたと短絡してはならない。むしろ本格的に宋銭が渡来したのは元時代だったといえるようだ。二度の元寇によって日元関係は冷え切っていたと思われがちであるが、これは錯覚にすぎない。「日中交流史上、近現代をのぞくと、じつはもっともさかんであったのは、モンゴル時代である」といわれている（杉山正明『クビライの挑戦——モンゴル海上帝国への道』）。この時期には数百人の留学生・留学僧が渡海した。逆に大陸からもすぐれた文化人・工芸家も渡来し、なかには日本に永住するものもあったほどである。そして宋銭は政権の自鑄のコインでもないで、しきりに来る日本の貿易船団への絶好の輸出品となったわけである。これ以降の経常的大量銅銭輸入の原因については後述にゆずるが、銅安（日本）・金高（中国）という日中間の事情も一理由であったことを指摘しておく。

輸入銭はリーガル・テンダー（法貨・本位貨幣）として時の政権から公認をうけぬまま、その実績をつくりつつわがもの顔で日本全国を縦横に流通した。それほどまで中国銭への需要が大だったということである。

他方、銭荒に泣く中国では、経済活動の停滞を防ぐべく通貨不足に対処して、紙幣が宋時代に交子として——宋の憲宗（在位 806-822 年）のころ——、元時代に交鈔として発行され流通した紙幣大国だった。この面での中国の顔は案外知られていない。

中国における紙幣のはじまりは宋の憲宗とするのはピーター・バーンスタインである（同『ゴールド』）。しかし漢では武帝の元狩 4 年に白鹿の皮で作った皮幣の歴史もある。本格的には九世紀末の唐で、紙幣に当る便挽——俗称で飛銭（『大言海』ではこれをカワセとよませている）という送金手形が登場している。富商が予った銭を見返りに発行する手形で、これを富商と関係し取引する商人に提示して銭を受取ったり、他人に支払いとして使用することもできるので、紙幣的存在だったのである。

#### 四 貨幣の普及

中国側の銅銭の輸出に関する資料に、包恢<sup>ヘイソウコウ</sup>『敝帚彙略』（13 世紀前半のもの）の巻一「禁銅銭申省状」に「（浙江省沿岸に現われる）倭の酷好する所のものは銅貨のみ」と断言している。タイトルの敝は破れるで帚はほうきである。南宋は 1214 年に銅銭の海外流出による銭荒をさけるべく、銅銭の禁輸令＝銅銭滲泄の禁令を出しても、官僚は賄賂で効果は出なかった。しかしこの包恢は例外であって稀有の硬骨漢であった（『南宋書』巻 55）。彼の上奏文によると、来航の日本船は年に 40 ～ 50 隻である。真珠・硫黄・水晶・蒔絵・螺鈿<sup>ラデン</sup>・刀剣等をもって来る。南宋は錦・陶器等で決済せよと命じるのだが、日本船は港を変える等によってまで銭を入手し、それを「高大深広」と彼が形容するように、分量はさておくとしても日本船はその大量の銅銭を船底深くかくしたという。

建長 6 = 1254 年に、律令政府は物価への悪作用をおそれて、渡宋船を年 5 隻と制限したが、中国銭の流通に対しては効果がなかった。この制限が前述の実物体系の「万物沽価法」尊重の政府の判断措置であることはいうまでもない。

藤原一族中心の政府は、以下の理由で貨幣使用の禁止を宣言する。



- 1 貨幣流通量によって常に物価が変動してやまないが、沽価法での表示の、例えば芋一貫＝米5合なら、それは不変に近い安定性をもつ。
- 2 宋銭の流入によって皇朝銭の質量——特に後期の八種——の劣ることが国民の眼にさらされることになる。
- 3 実物経済に立脚する貴族が、<sup>ジゲ</sup>地下人の貨幣所有者に存立の地盤が侵されることになる。

かくて律令政府は<sup>ケビイシ</sup>検非違使を<sup>シツタ</sup>叱咤・駆使しての貨幣流通禁止令を出したものの、打寄せる波に吠える犬にも似て、時流に逆らうものにすぎず効果はみられないに等しい。

正治2＝1200年のこと、<sup>ジニン</sup>検非違使の能宗（ヨシムネ又はタカムネ）の郎党が京の市中で大津在の<sup>ジニン</sup>神人——神社につかえる下級神職やそれに準じるもので、門番・清掃をするもの——の利正に物品を売り、その代価として差し出された准帛を嫌って銅銭を要求した。利正は貨幣の使用を禁止されているとして銅銭での支払を拒否した。しかし能宗の郎党は、貨幣使用は吾々の間だけのことで他人への露見の心配は無用であると言葉たくみに云って、借金の段取りまでつけてくれたので銅銭を使用して代価を支払った。その後しばらくして能宗郎党が利正を貨幣の使用で禁制を犯したと告訴し捕えた。これに対し先ず利正の仲間の大津神人が動き、ついで彼等の保護者である延暦寺が立った。最終的には<sup>オンル</sup>利正放免・能宗遠流となった。（『天台座主記』64世・弁雅。正治2年6月2日条）。

この事件が象徴しているように、貨幣の使用・貨幣による物品の価格表示は着実に前進普及していった。そのことを示すものに、もとより限界をもってはいるが、暦仁2＝1239年1月12日の幕府法追加99条で、陸奥国の百姓が絹布での年貢の代銭納訴訟を「公損之基也」と断じて、以後「白河関以東」の「銭流布」を禁じて物納を命じたのである。これは身勝手というべきものである。がとまれこのことによって白河関以西までは貨幣が流通していたことがわかる。

## 五 青砥藤綱物語

北条泰時の嘉禄2 = 1226年の幕府令は、貨幣が本格的に活動しだしたことを象徴するものというべく、「准布・准帛停止<sup>チョウジ</sup>、銅銭使用」とある（『吾妻鏡』）。

田畑に課する税は段米<sup>タンマイ</sup>とよばれ、朝廷・幕府の事業のための臨時税である。家屋に課する税は棟別米<sup>ムナベチマイ</sup>とよばれ、朝廷の宮殿・社寺の造営・橋梁の修理のための税である。これが右の幕府令によって銭納となり段銭・棟別銭とよばれることになる。

銅銭の流通を禁止する側にも変化が生まる。承久3 = 1221年、伊予国からの京都への年貢が米ではなくて貨幣で納入させている。嘉禄2 = 1226年、朝廷は造大神宮役夫米の賦課について、吉田社領に対し、准布をやめて銭で納入させるという自分で自分のために禁制を破っているのである。

これらの客観的事実をバックにしてこそ、後醍醐天皇の建武元 = 1334年の銅貨・乾坤通宝<sup>ケンコン</sup>計画となるのだが、それはともかく康永2 = 1343年においても、尚、検非違使は新銭作りや銅細工師等を捕えた（『八坂神社記録』『社家記録』同2年11月1日条）。そして渡来銭の偽造が摘発されるのだが、これは中世唯一の摘発事件でもあった（同2年11月1日条）。

室町幕府は、銅銭偽造は不可と思いつつ禁止にとどまり、銅銭偽造はむしろ不足貨幣の補充として歓迎し黙認していた。それほどまでに経済の貨幣化が進行していた。

このことを示す例は実に多い。貨幣流通の足音は確実に高まってくるのだが、それを確かに証明するものとして、経済の研究者としてはより詳細な数多くの事実をいとうことなく示すべきかもしれない。しかしここでは無精にも!? のような即物的なものではなくて、より効果的とも思える間接的なものによって、貨幣流通事実を証明してみたい。それは貨幣流通を物語る文芸作品である。もとよりその性格上、細部のひとつひとつが真実だとはいわないが、全体としてそれは貨幣流通という客観的条件を反映していることが明白だからである。

文芸作品とは『太平記』巻35に出てくる青砥藤綱のエピソードである。もとより彼が財務官？法務官？との説は別として、そもそも実在の人物なりやという問題はここでは別としたい。

青砥藤綱は火鑒石袋ヒウチイシの中に入れていた10枚の銅銭を、夜の鎌倉ナメリは滑川に落してしまった。もっての他とばかりに慌てて一把五文タイマツの松明——単なる物品ではなくて、販売を目的とした商品としての松明の存在に留意の必要あり——を10把購入、つまり10文の銭を拾い上げるための照明用に50文を投じて松明を入手したのである。

この話を聞いたものが、これでは収支があわぬではないかと笑った。合理的感覚をもつ一般人なら笑うのが当然であろう。「川に1ターラー（Thaler）を落した場合、これを拾い上げるのに2ターラーを投じることはあるまい」（イェーリング『権利のための闘争』）との言葉を引くまでもないだろう。

ついでながらこのターラーという貨幣単位名は、16世紀の南ドイツ、というよりは現チェッコはボヘミアの地に、エルツ山脈につらなる山の割れ目の一つとして聖ヨアヒムとよばれる谷があった。この谷に銀山が開発されて沢山の銀の産出をみた。この銀で製造されたのが、このターラー銀貨だったわけ。聖ヨアヒム谷から採取された銀で製造されたことから、これを谷＝ドイツ語でのタール（Thal）からとれたものだからターラーとよばれたわけである。このターラー銀貨は全ヨーロッパで愛用されたのみならず、各国はこれを手本にして同質量の銀貨を作り出した。

このターラーをイギリスではダラーナマと訛り、アメリカの貨幣名になったというわけである。なおドルとはダラーの日本語訛りである。これはこれでよいのであるが、にもかかわらず未完全というか尚詰めるべきものが残っているのである。具体的に云おう。ターラーがダラーになったにしても、同様にターラーがタラーになる可能性もあるわけである。なのにターラーがダラーになる必然性・当然性がいまひとつもの足りないのである。

この問題を取扱うために話を再びターラーの原産地の聖ヨアヒム谷に戻す。

大型銀貨のターラーは、西欧社会の大歓迎をうけて、またたく間に広く深く流通するようになったが、それに伴って近接地帯ではそれぞれ訛ってターラーの名称が伝播した。東方へは、例えばポーランドではタラール (Talar), 南方へは、例えばエチオピアではタッレロ (Tallero), 西方では、例えばオランダへはダルダー (Dalder), 北方では、例えばノルウェーへはダレル (Daler), として、それぞれが伝わるようになった。

上記のターラーの伝播現象を客観的に眺めてみると、ここに一つの法則のような傾向の存在に気がつく。それはターラーのタが東・南・東南方向へはそのまのタ (T) だが、西・北・西北方向へはタがダ (D) と訛って伝わったということこれである。

かくてヨアヒム谷からみてオランダ・ノルウェーをこえての西北部に位置するイギリスへは当然にダラー (Dollar) と訛って伝わるわけである。換言すればイギリスがポーランド・エチオピアをこえての東南部に位置していたのなら恐らくタラー (Tollar) になっていた筈である。このようなわけでターラーはイギリスでは必然的にダラーになるわけで、タラーの入りこむわけなどありえないことがわかる。

本筋にもどる。合理性に欠けるという常識人からの批判をうけた藤綱は泰然としてこれを聞き、やがて以下のように自論を展開して反批判をこころみた。「10 文の銭を拾い揚げるのに 50 文の銭を使うという行動が矛盾・辻褄のあわぬことはその通りである。しかしこの思考はあくまでの一個人の行動範囲・視野を出るものではない。これでは駄目であって、およそ庶民の上に立って行動するわれわれは天下国家の立場で思考し行動しなければならない。このような立場にあれば、おのずから銅銭が天下の宝物であることは明らかになる。それを一個人の視点で  $10 \text{ 文} - 50 \text{ 文} = -40 \text{ 文}$  というさかしらな思考から、これを見捨てるのなら 10 枚の銅銭は永久に失なわれることになる。逆にこれを自分がやったように拾いあげて再び通貨として活用すれば、それは 50 文にも 100 文にも活動するではないか」と論じた。

更につづけていう、「松明代の 50 文のことだが、これを入手した松明屋は彼の必要品を購入するために支出するであろうし、この 50 文を受け取った次の店のものも再び同じようにこれを更なる買い物に支出するであろう」と述べ、今や経済学界では常識となっている最初の支出の波及効果によってその数倍になるというケインズの有効需要論——ここではこの理論内容を割愛する——を展開して、世間を大いにうるおすと述べたのである。この点、世間では井原西鶴と同じ思想の持主と評されているが、碩学ケインズの先駆者だったといえる。「彼此、六十ノ錢一ヲモ不失、<sup>アニ</sup>豈天下ノ利ニ非ズヤ」(『太平記』)。鎌倉期の流通し出した貨幣をバックにする右の発言にみえる藤綱の貨幣哲学・見識をかみしめたい。

## 六 兼好法師と頼阿

上記のエピソードと前後するものだが、もう一つの文芸作品!? を紹介しよう。もとより貨幣の活動開始を物語るものである。

中世日本の代表的知性人——いな現在までの日本のといっても過言ではないだろう——といえ<sup>ウラベ</sup>ば卜部こと吉田兼好(1282-1350)に思いつく。

鎌倉末期から南北朝時代にかけて活躍した人物で、随筆集『徒然草』の作者として彼は有名である。しかし当時においては冷泉派・京極派と拮抗する藤原定家<sup>ヒマゴ</sup>の曾孫・爲世<sup>タメヨ</sup>が開いた二条派を背負う歌人として、しかも僧淨弁・能誉(伝未詳・後に淨弁の子・慶運と入れかわる)・二階堂貞宗こと頼阿とともに和歌四天王の一人として今川了俊——武将時代の名前は貞世——にたたえられた短歌の達人として兼好が有名だったことは、現在のところ存外に知られていない。

実は『徒然草』は室町時代を通じて問題にされることもなく、和歌四天王の一人として兼好の名声にあくまでも付随してのみ、一部の歌人や連歌師の間でひっそりと書写・継承されていたにすぎない。現在では全く考えられないことである。

話しかわるが競技というものは、肉体的であれ思考的であれ、その差にもかかわらず、一定のルールに従うという点で共通している。これこそが競技を面白

く盛立てるのである。ルールあってこそその競技といってもよい。ただしこのルールも、これに従って繰返し競技を行うと、やがてマンネリ化し興味が半減してくることも共通している。日本野球のバシフィック・リーグの指名打者制はそのあらわれである。守備のナインに必ず女性を加えよという時代到来なしとは云い切れないであろう!?

ルールの疲労は知的ゲームにおいてはその度がきついに思われる。表現形式の画一化という点をつく正岡子規の『古今和歌集』批判もその一例だろう。この場合ルールの改変によって競技の刺激・魅力をとり戻す工夫が施される。

短歌をつくるための装置として題詠というものがある。桜とか秋という歌の題を設けて詩歌を作ることである。完全な自由よりは題が決められることによって、逆に他が自由と感じられ、詩歌が作りやすくなるという心理作用を伴う工夫である。

それはそれとして、ここで短歌の達人として誉れたかい兼好の作品を紹介してみよう。

よも涼し ● ねざめのかりほ ● た枕も ●  
 ま袖も秋に ● へだてなきかぜ ●

名人兼好の和歌がこれだと示されても、和歌の素養も関心も、そもそも筆者こと情緒心のない人間には、悲しいことに何回よみ返してもなんの感動も一向に湧いてこないのである。あえて感想を求められれば、単なる秋の夜の一情景・描写ではないのか。しかも作者は手足をしばられたような、余裕もうるおいもない、伸々した点のないものと答えざるをえない。私見はある面で正しかったのだが、この道にくわしい人物からこの短歌の性格を教示されるや、私見は一挙にして崩解し、逆に流石は名人兼好よ!! と驚きの念とともによみ直したことだった。

実はこの和歌は和歌でも折句歌だったのである。単なる短歌ではなかった。周知のことと思うが順序にしたがって、若干の解説をつけておきたい。ここに

いう折句歌とは五文字から形成されている言葉＝句を、和歌を構成している五つの句——初句・二句・三句・四句・結句のそれぞれの句頭に、その折句とされる言葉の五文字を一字ずつ折込むことで競う新ルールにしたがう和歌である。したがって各句の句頭にある文字を拾うことによって折句の内容がわかることになる。

あの有名な「昔男ありけり」で知られている在原業平の『伊勢物語』に登場する折句歌で、業平らしき人物が三河でカキツバタ杜若を見て

▲  
からごろも    ▲  
きつつなれにし    ▲  
つましあれば  
▲  
はるはる来ぬる    ▲  
たびをしぞ思ふ

と▲をつけた「かきつばた」の句を折込んで作歌したのが有名であろう。因みに、正確に言えば「かきつはた」であって「かきつばた」ではない、当時は濁点の有無に拘束されることなく、必要に応じてその場における正しい発音をしていったようである。

右の代表的ともいえる業平の折句歌をネタにしたもので

業平の 折句の歌の まねをせば

たちまち恥を かきつばたかな

との江戸初期の歌人・松永貞徳の狂歌は有名である。川柳「中將の道草に折るカキツバタ杜若」（『誹風柳多留』）も同様である。句中の「中將」は彼が右近衛権中將にあったことから業平のこと。「折」は折句にかけている。蛇足ながら。

業平段階のこの単純なルールに改変を加え、折句競技の興味を増大させるため、短歌の各句の句頭に折込む——これを冠カンムリという——だけではなくて、句尾にも折込む——これを杓クツという——新ルールの二重というか往復の折句での作歌が競われることになった。

新ルールの折句歌作製には高度の思考・技術が必要であるが、その成果の折句の冠をまず前から拾い出し、ついで逆に後から杓の句を拾い出すにもかかわらず、国文学の世界ではなぜかこの往復化折句歌を拾い出す順にしたがう冠杓ではなくてこれを杓冠と逆によんでいるのである。素人のわれわれにはヘソ曲

りとしか思われぬのだが、語呂がよいとでもいうのだろうか。その理由はわからないようである。ついでながら杳の文字の下日は太陽の日ではなくて、例の孔子イワクの曰である。

話柄は貨幣についてのはずだが、国文学ではないぞ——との咎める言葉が聞こえてきそうである。そこで早速に冠杳といたいのだが、杳冠の観点から兼好の歌をみると、それは流石に兼好法師よと思わず手を打つ秀歌なのである。兼好の二重化・往復折句の冠は▲をつけた文を前から拾い出せば「よね（米）たまへ」、杳は●をうしろからたどることによって「ぜに（錢）もほし」であって、米と錢を求めるメッセージのかくされていることがわかる。

この杳冠折句歌は、実は親友にしてライバルでもある同門四天王のひとりである二階堂貞宗こと頓阿あてに出されたもので、これは彼自身の返歌とともに彼の『続草庵集・雑体』に記載されているものである。これによって兼好から杳冠折句歌を贈られた頓阿もさるもの、早々に同趣向の折句返歌を次のようにおくり返した。

よるもうし ● ねたくわがせこ ● はては来ず ●  
 なほざりにだに ● しばしそいませ ●

頓阿の返歌は女流歌人になっての作歌であることが明白で、いわば相聞歌的折句歌がここに展開されるわけである。夜はつらい。一緒にねたい彼は遂に来ない。かりそめでもよいから、一寸の間でも私の横にいて下さい。ネー、いいでしょう。というのである。そこで頓阿の折句メッセージを拾い出すと、まえから▲の冠では「よねは（米）なし」うしろからの●の杳では「ぜに（錢）ずこし」であることがわかる。

兼好・頓阿間での交換折句歌の解明によって知ったことは、そもそも5文字からなる折句＝言葉の内容決定は歌人の全面的自由に属するものであって、雪月花でも花鳥風月でも、いな森羅万象どれひとつとして可ならざるはないのである。それなのによりによって彼等は錢と米とを採用しているのである。一見話柄とは無関係と思われる短歌形式を借りる言葉遊びを長々と紹介したが、実



は本稿のテーマの貨幣に大いに面白くかわるものであることが解ってもらえたと思う。このように米と肩をならべて、他ならぬ貨幣が重要視され取扱われていることは、当時の貨幣流通という客観的事実の反映そのものである。

## 七 『徒然草』における貨幣哲学

貨幣を取扱うものは和歌だけではない。兼好にそくしていえば、彼の生前には無視されたと同然の取扱いだった『徒然草』にも貨幣は再々登場している。

『徒然草』217段では大福長者の致富論の批判が展開されている。大福長者とは当時出現しはじめた錢持ちのことである。錢持ち＝大福長者になりたいという大欲達成のための禁欲＝無欲になる＝錢を使わないということは貧者とかわりないではないかと、蓄錢のための禁欲＝貧者と同じということを結論とするものである。兼好特有のヘリクツによる自己満足の感がする。とまれ蓄錢のための蓄錢が貴族・武士・僧侶等の生活基盤を脅かす新興階級からの衝撃をうけたこと、そして中世日本の代表的知性人にも貨幣経済の出現が、その理解をはるかに越えるものだったことを示している。

しかし『徒然草』第108段では趣が違う。「寸陰惜しむ人なし。これよく知れるか、愚かなるか。愚かにしておこたる人のためにいはば、一錢かろしといえども、これをかさぬれば貧しき人を富める人となす。されば商人の一錢を惜しむ心切なり。刹那おぼえずといえども、これを運びてやまざれば、命を終らる期忽ちにいたる。されば道人は、とほく日月を惜むべからず。只今の一念むなしく過ぐる事惜しむべし」

この一文は江戸時代の井原西鶴の『日本永代蔵』に見える叙述かと思わせるに足る処世哲学・貨幣経済承認の貨幣哲学の展開である。出典をかくせば西鶴のものとして十分に通用するものである。それほどまでに貨幣欲＝貨幣経済の肯定とその普及の事実を伝えている。

同じく60段にもあるエピソードとともに貨幣哲学が述べられている。京のニンナ仁和寺の高僧・ジョウシン盛親は芋頭（里芋の親芋）が好物だった。先代住職から相続

した錢 200 貫と坊舎一つの坊舎を錢 100 貫で売却し、計 300 貫を京の人に予けた。その錢を必要に応じて京の人から取りよせて、そのすべての錢で芋頭を心ゆくまで食べつくして死んだ。このように「好物は 三百<sup>ベ</sup>を 喰いなくし」（誹風柳多留拾遺）八篇二五丁）という自己中心の生活を送った者なのに、世評はすこぶるよくて有徳<sup>ウトク</sup>の自由人だったといわれた、と。

貨幣というものはこのように有効に使うべきで、蓄銭は意味なしと言う彼の貨幣哲学が顔をのぞかせているわけで、ここにも貨幣肯定思想が見出される。中世日本人の社会的意識の革命あるいは精神革命の成立をここに見出すことができる。

奈良時代に奈良の都を中心とする地域に貨幣の流通圏をみるのだが、その限りにおいての意識・精神革命の一つの証拠として『日本靈異記』にある物語をあげることが出来るだろう。それによると吉野山中で3年にわたり修行した<sup>ミタシロノアマズマヒト</sup>御手代東人が下山して、観音さまに授けてほしい福の内容として、絶えず口にしていたものは、「南無（掃依するということ）、銅錢万貫・白米万石・よき女数多施せよ」というものである。現代人にも通じる欲求であって、物々交換盛んな古代にあって、貨幣を米と同等に位置づけることは、奈良時代人に精神・意識革の起ったという事を物語るものであろう。

ただしこれは本稿の劈頭において言及したように、中国をめぐる諸蕃国＝小国における外交の一つとして、日本經濟水準を無視しての上からの強行的貨幣流通であって、中国同様の貨幣流通＝文化水準を誇示したまでのことである。この無理がたたって貨幣流通は中絶し、しかも意識・精神革命は貨幣流通圏の限られた一部の人々においてのみであった。これに対し南北朝時代の精神革命は永続するものであって、国民社会全体のものであり、その質量は比較にならない。

日蓮といえば貨幣とは相容れないと思われる鎌倉時代の傑僧であるが、弘安2＝1279年8月8日の「上野殿御返事」において、「あつきには水<sup>タカラ</sup>を賤とす。さむきには火<sup>キン</sup>を賤とす。……金と申すもの国王も賤とし民も賤とす。たと

えば米のごとし。一切衆生のいのちなり。ぜに又、かくの如し」(岩波文庫版『日蓮文集』)と貨幣を肯定している。

佐々木銀弥教授によると、荘園からの年貢(米・豆・雑穀・絹・綿・糸等)は13世紀から14世紀の前半にかけて広く代銭納されていたようである。その実体は農民からの物納品を現地荘官レベルで売却し、その現金をあるいは割符で都の領主に送られ、農民の頭越しに荘官・商人・領主間に貨幣が動き、農民はそれぞれにかかわることがなかった。

古来から強制されていた養蚕は衰退し、糸・絹・綿の納入不可能なのに物納を強要される側から、それらの代銭納が求められるようになる。このために必要な錢——大半は年貢の代銭納用であり、その一部は農具用である——は都合のつく農作物・加工品・自然採取物等を市に持込み、売却して入手した。ただし15～16世紀の畿内で多くの農民が年貢用の代銭納の貨幣捻出に追われ、債務多重化の穴に入らざるをえなくなった。とまれここにこれまで進んできた貨幣経済、しかも奈良時代のそれとは全く異質貨幣経済の延長線上に、いよいよ本格的というか世界的水準をゆく貨幣経済が出現するわけである。その事を章を改めて説明・証明することにしたい。